

[資料・その他]

養老事業にみる福祉思想（Ⅱ） ～報恩積善会の歴史から～

大友 芳恵¹⁾，渡辺 啓太²⁾

1) 北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

2) 特別養護老人ホーム 緑愛園

序論

(問題の所在と研究の目的)

老人ホームの前身は養老院であるが、養老院の名称で高齢者だけの保護を始めたのは、1895（明治28）年の聖ヒルダ養老院であるといわれている。しかし、窮民救助は養老院以前からあり、全国養老事業協会が1933（昭和8）年に実施した「第1回全国養老調査」によれば、小野慈善院¹⁾（石川県）が最も古くから、障害者や困窮者、子どもや病人などを救済してきたと記されている（全国社会福祉協議会，1984）。

その後、小野慈善院や東京府養育院などによる混合収容の窮民救済施設が少しずつ全国に拡がり、神戸養老院、大阪養老院、奈良養老院、京都救済院、函館慈恵院などの養老院が創設され、そのいずれもが高齢者の収容のみならず、必要に応じて孤児や浮浪者、行旅病人などを収容してきた歴史を持つ。明治30年代には養老事業を行う施設の急増がみられたが、政府はこれらの施設に対する公的救済には消極的であり、その多くは民間の宗教家や慈善事業家により、私費と寄付金を財源に運営されていた。しかし、公的救済を基本としないにもかかわらず施設の創設にあたっては県への届け出と許可が必要であった。当時の養老院創設者たちの苦労について小笠原（1984）は「財源集めだけでなく、公的救済に消極的な行政の姿勢ともたかかわなければならなかった」と記している。

養老院創設者たちは様々な苦労の中にあっても、明治・大正期における養老院は養老事業に対する明確な目的意識をもって運営されてきた。この目的意識は設立にかかる趣意書から読み取ることができる。小笠原（1984）は、趣意書にはいくつかの共通点があるとして、①当時の貧困や高齢者の生活難、困窮に対する強い思い、②高齢者や貧困者が置かれている状態や、その人々に対する人道主義的姿勢であり、貧しき人々や老いとその孤独に悩む人々に対する温かみやそれを放置するものへの怒りといったもの、③養老事業、慈善事業に対する強い使命感であり、当時の貧困や困窮に対する問題意識とその改善、克服のための人道的視点にたっ

ての養老事業に対する使命感、④「苦戦苦闘」の長い歴史を歩んでなお悲惨な老後を迎えている高齢者を「悠悠自適長ニ天命ヲ全フセシメン」という高齢者観、保護観のもとに養老事業の重要性を指摘し、強調しており、そうした考え方と共に養老事業が他の分野から遅れているとの認識も強い、と創設時の養老事業に対する志について整理している。

養老事業は養老院という名称で施設運営に着手した小野慈善院の1873（明治6）年から始まり、現在の2022（令和4）年で149年が経過し、その歴史はいまや150年をむかえるに至っている。今日の社会において、高齢者を対象としたサービスは多様化し、施設は民間の住宅型の有料老人ホームやサービス付き高齢者住宅など、さまざまなサービス提供主体が高齢者の生活を支えている。このような時代であるからこそ、サービス提供にあたって核となる「対人援助における価値」とは何かを、あらためて養老院の歴史を検証することを通してケアの根源となる思想から学ぶことが重要であると考えられる。

そこで本研究では、施設名称を改称することなく創設110年をむかえ、また、創設者の思いを知る親族が代々の法人運営責任者である岡山の報恩積善会の歴史から対人援助における福祉思想を検証することを目的とする。

(研究対象と研究方法)

岡山の地で養老事業の先駆けとなった「養護老人ホーム報恩積善会」（今日現存している老人ホームのうち、養老院創設当時の名称を施設名としている唯一の施設である）を研究対象とし、歴史に通底する福祉思想を明らかにするために、主として報恩積善会に関する先行研究、『創設100周年記念誌 流光を紡いで』（2012a）『創設100周年記念 流光を紡いで DVD』（2012b）の記録を資料とした。加えて、創設者の孫で、創設者と共に養老院の高齢者等と同じ屋根の下で暮らす経験をしてきた前理事長へのインタビューを実施（2021年11月19日実施）した。また、研究に際して、日本社会福祉学会倫理規定を遵守して実施した。

1. 岡山県における養老事業の萌芽

報恩積善会は、1912（大正元）年9月に創設された

<連絡先>

大友 芳恵

北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

岡山県で初めての養老院であり、全国的にも古くから事業を継続している老人ホームの一つである。

岡山は明治時代の中頃から昭和初期にかけて、後に「岡山四聖人」と呼ばれる、①岡山孤児院を創設し、児童福祉の父といわれる石井十次（1865～1914）、②少年感化事業の実践家である留岡幸助（1864～1934）、③岡山博愛会を創設した宣教師のアリス・ペティ・アダムズ（1866～1937）、④日本人初の救世軍士官であった山室軍平（1872～1940）を輩出している地である。彼らは恵まれない人々に深い愛情をもち、救済事業に熱心に取り組んできた。この四聖人の活動に刺激され、岡山県では各地で社会事業が展開されるようになり、報恩積善会もその一つである。

また、岡山は民生委員制度の起源ともなる「济世顧問制度」がある。高齢者や障がいのある方の福祉に関すること、子育てなどの不安等、様々な相談に応じ、誰もが安心して生活できる地域づくりをめざす民生委員制度は、1917（大正6）年に岡山県で創設された「济世顧問制度」がその起源だとされている。

济世顧問制度の生みの親である笠井信一（1864～1929）²⁾は、1914年から岡山県知事を務め、1916年に宮中に各地の知事を集めた地方長官会議の席で大正天皇から岡山県の教育や貧困者の状況について尋ねられたことを契機として、すぐさま県下の貧困者の実態調査を実施した。その結果、県民の1割が極貧状況にあることが判明し、この現状から笠井は「教育、勧業、土木等我等の施設は所謂一般方略に過ぎなかった」とこれまでを省察し、住民の生活を案じて外国の防貧対策などを研究し、その成果を「济世顧問制度」としてまとめ、1917年5月12日に公布に至っている。これが現在の民生委員制度の源となっており、この制度の公布を記念して、5月12日は「民生委員・児童委員の日」となっている。

上述したような人々が多く輩出されている岡山の地で、高齢者に手を差し伸べようとしたのが「報恩積善会」である。そもそも、当時の日本においては、年老的な親は子どもが養育するものだという規範意識が定着していたため、養老院という施設は、孤児院に比べると設置が遅れていた時代であった。

1) 報恩積善会の創設

報恩積善会は、1912（明治45）年の明治天皇崩御を契機に、田淵藤太郎がそれまでの菩薩孤児院などの救済事業従事者の経験を生かして貧困者の救済事業を自らの手で始めようと、1912（大正元）年9月24日に創設した私設慈善団であった（小笠原，2001）。

創設者の田淵藤太郎は1876（明治9）年に生まれ、その後田淵家の養子に入った。養父の田淵十三郎は、「子どもができてうれしい、しかし、世の中には子どもがいない気の毒な人がたくさんいる」と常々言って

おり、養子として入った藤太郎が聞いたその言葉が、養老院というものを創設する動機となった（井村，2020）。その養父の戒名の「持法積善」という文字から「報恩積善会」という名称を付けたとされている。

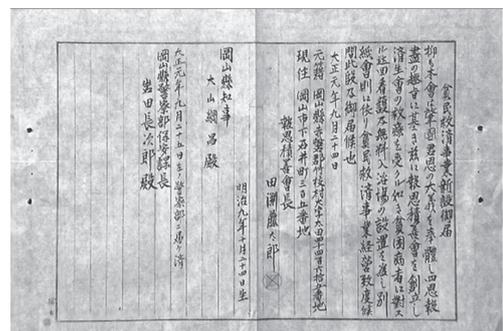
藤太郎は1905（明治38）年、現在の岡山県笠岡市にあった浄土真宗関係の孤児院「甘露育児院」で修業を積み、社会事業を志す素因を形成したといわれている。



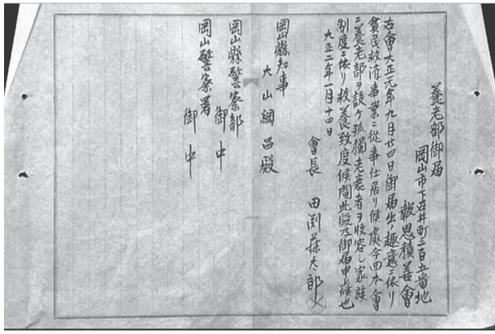
田淵藤太郎（左）と妻の田淵はつ（右）
出典：『創立100周年記念 流光を紡いで DVD』（2012年9月）より転載

妻のはつは1878（明治11）年に生まれ、20歳で結婚するが夫が死亡し、同じく妻を亡くして二人の子どもがいた田淵藤太郎と再婚し、その翌年に報恩積善会が設立された。

最初は地域の貧困家庭や病人のいる家庭に看護職を派遣する巡回看護を行い、困窮している家庭を巡回して看護にあたらせた。また、地域にはお風呂に入れない高齢者がたくさんおり、無料の入浴券を配布し、高齢者にお風呂に入ってもらう事業にも着手した。この在宅で生活する人に関わるなかで、在宅ではなく施設に収容しケアしなければいけない高齢者が多くいることに気づき、施設収容の必要性を認識することで、翌年の1913（大正2）年1月に「養老部御届」を岡山県知事に提出し、これにより収容事業、つまり高齢者とともに生活するという養老事業が開始された。この施設には高齢者だけではなく児童や障害を持っている人も収容されていた。



知事に提出された「貧民救済事業新設御届」
出典：『創立100周年記念 流光を紡いで DVD』（2012年9月）より転載



「養老部御届」

出典：『創立100周年記念 流光を紡いで DVD』（2012年9月）より転載

2) 田淵はつに託された養老院の運営

田淵藤太郎は事業の財源確保に奔走し、1928（昭和3）年の1月1日に54歳の若さで亡くなり、その後、施設長や会長を誰にするかが協議され、結果的に、藤太郎の妻のはつが会長、施設長に就任するに至った。井村（2020）は、この時代女性の養老院の施設長は非常に珍しいことであり、田淵はつには多くの不安や苦労があったと推察している。昭和初期は戦争、災害、金融恐慌が相次ぎ、組織運営に困窮を極めていた時代であるが、はつが施設長となり発刊された『報恩積善会養老年報』の1932（昭和7）年の報恩積善会の役員体制をみると多くの人々による支援体制があったことが見て取れる。この支援体制がどのようなものであったのかについて、井村は講演の中で以下のように述べている。

役員の中に河本乙五郎という人がいました。田淵家は日蓮宗です。施設も日蓮宗の僧侶が役員になっていました。その中で河本乙五郎という人物が役員になったというところに着目しました。この河本乙五郎は熱心なキリスト教信者でした。彼は、皆さんご存じの石井十次³⁾を支援し、岡山孤児院が財団法人になった時、大原孫三郎⁴⁾とともに評議員になった人物です。このように宗教、宗派を超えた人々の支援体制が形成されていたのです。

報恩積善会の年次報告書で公表された役員の中には、岡山市長の名前もありました。あるいは当時の日蓮宗の僧侶、山陽新報社（現山陽新聞社）の社長、就実高等女学校の校長の名前が掲載されていて、いわゆる施設の組織固めを昭和初期に行っていました。これも、田淵はつの人柄もあったのだらうと思います。行政、経済、報道、社会事業、教育、宗教関係者が役員になり、支援組織の強化を図ったのが昭和初期です。（井村，2020，195-196）

公的救済が十分でない時代において、田淵はつには、養老院を運営していこうとする強い信念と、人の支援に対する志があったと思われる。

田淵藤太郎が亡くなった翌年1929（昭和4）年には世界恐慌や米価の暴落などが起こり、救護法が同年に公布されたものの財源難のため十分な支援は行われず、それに対して方面委員が中心となって1930（昭和5）年「救護法実施期成同盟会」が結成され、全国的な社会運動が広がり、1931（昭和6）年に「救護法」実施に対する国家予算が成立し、翌年の1932（昭和7）年に「救護法」の施行に至っている。

また、全国ばらばらに養老事業を行っていたため、「全国養老事業協会（現全国老人福祉施設協議会）」の設立がなされ、日本の養老事業の組織化や近代化に大きく寄与した。

救護法の成立により、養老院は救護施設となり救護費が下りるようになると、それまで賛助会員として施設を支えてくれていた地域住民が賛助会費は必要ないと考えたところもあり、救護法によって民間の養老院はむしろ財源難に陥る状況もあった。

井村（2020）は報恩積善会について、1932年度の賛助員会費は減少しているが、1933年からは増加しているとし、田淵はつが『養老年報』の「感謝録」に掲載した文章を紹介している。

1936（昭和11）年、「12月24日、早朝、二十歳前後の青年二名来会され金子五円也にて老人に正月、物を買って与えられたしと氏名をつけず帰宅され」

当時の施設長であった田淵はつはそういう経験をし、地域社会の人々の支援、名を告げずにお金を提供してくださる地域の人たちから精神的な勇気をもたらたと記している。



田淵はつ

出典：『創立100周年記念 流光を紡いで DVD』（2012年9月）より転載

ここにみられる地域の人々とともに歩む施設の姿勢は現在も貫かれている。

II 孫の語りからみる「はつばあさん」⁵⁾から受け継がれたもの

1) 「はつばあさん」と共に

田淵はつの孫である前理事長へのインタビューのなかで、「はつばあさん」と過ごし、養老院の人々と

もに生活してきた中での思い出を語っていただいた。

前理事長は1946（昭和21）年生まれで、はつが亡くなるまで一緒に生活していたそうだ。

報恩積善会は支援する人、支援される人とを分けることなく、養老院のなかでお年寄りとともに一つ屋根の下で一緒に生活をするという家族的なケアが提供されており、施設の中に家が併設されていたため、お年寄りとのかかわりは仕事としてではなく、生活の中にあっただともいえる。

1947（昭和22）年、田淵はつは69歳の時に施設の実務を息子達に委ね、剃髪して僧籍に入り、以降は高齢者の精神的支えとなり亡くなった人々の供養の奉仕活動に専念した。

藤太郎の亡き後を、高齢者とともに養老院の中で生活し、高齢者や職員とともに苦労を共にするなかで、病を抱えた高齢者も多くおり、そのような中で人の死を日々見つめてきたであろう。はつが僧籍に入ることを決めた背景には、人の死、人間の生きる意味、生きる上での感謝とは何か、等々を自問し、それらの悟りを仏教から学びを得たのだと推察される。

その様子を、以下のように語っていただいた。

「はつばあさん」が、年寄りの人の話し相手になったり、相談にのったりしている姿をいつもみていました。

私にとっては老人ホームの入所者の人はすべて私の本当のおじいさん、おばあさんみたいに思うとんです。おもりしながら（子守りをしてもらいながら）育ちましたから、当時は病院で出産ということがなかったから、私は報恩積善会で生まれて育ったんです。だから、お年寄りの人の名前と顔は今でも一致します。覚えています…

小さいときは、4～5歳位までは、お年寄りが亡くなると火葬場に行くのが楽しみだった。タクシーに乗れるんですよ。前の席で膝にのって火葬場まで行く。タクシーに乗る事なんてなかったですからね。ただ、タクシーに乗れることが嬉しかった時代です。

それから物心がついて、やっぱり本当のおじいさん、おばあさんと思っている人が亡くなったときは火葬場に行くのがつらくなって、それからは行かなくなった思い出があります。

前理事長は、田淵はつや養老院のお年寄りとともに生活をする中で、人が生きること、人の死、人を思う心、共に生きること、といった根源的な価値が問われる現実に触れるなかで福祉思想が醸成されてきたことがうかがえるのではないだろうか。

人のために生きてきた、田淵はつは1960（昭和35）年に83歳で亡くなっている。

2）「はつばあさん」から受け継がれたもの

現在の報恩積善会では、毎月1日と月の中旬に「しのぶ会」が開催されている。これは、田淵藤太郎の命日が1日であり、はつの命日が14日であることもあり、みんなで集まり亡くなった人を偲ぶ「しのぶ会」を実施しているとのことである。

前理事長は僧侶ではないが、このような会を継続し、時には葬儀の際の導師の役割を担うこともあるとのこと、以下のように語っていただいた。

同じ屋根の下で一緒に生活したもんが、みんなで見送る。仲間と一緒に暮らした人に送られることが心の安らぎに通じると思うんです。

納骨堂もあり、養護から特養に変わられた方も納骨堂を利用できるようにしています。安心感があると思うんです。

「はつばあさん」のかかわりが心の中にあっただから、自分もしたいなあと思ったんです。

田淵はつの志は、今にも受け継がれていることがうかがえる語りであった。

2）地域と共に

報恩積善会はそもそも養老院からスタートしたのではなく、養老事業のはじめは、在宅に向いて貧困高齢者の巡回看護および無料入浴券交付事業を行い、人々が地域で暮らし続けることを支えてきた経緯がある。現在の報恩積善会では、昼食をお弁当にして地域の高齢者の方に配る「配食サービス」、報恩積善会に来て食事をする「会食サービス」、また、「こども食堂」を実施している。例えば、「こども食堂」のチラシには以下のような紹介文が記載されている。

みんなで作ろう！食べよう！つながろう！

「つしまみんな食堂」⁶⁾

誰もが地域の一員としてちょっとした役割が持てる、地域をつなぐ場所をみんなで創りましょう

・「つしまみんな食堂」は子どもから高齢者の方までみんなで一緒に…

・「食」を通じて、多世代交流の場を作ります

・「作る」体験を通じて、食育に取り組みます

・みんなで「食べる」を通じて、孤食を防ぎます

・フードパントリーやフードシェアリング等を通じて、食料支援や食品ロス削減に取り組みます

・ワークショップを通じて、体験活動や地域交流の場を作ります

【津島・伊島学区及び近隣小学校区の子どもから

高齢者のかたまで】

この取り組みには、まさに報恩積善会の脈々となってきた福祉の思想を見出すことができるように思う。

前理事長は「はつばあさん」との時代の思い出を以下のように紹介してくれている。

むかしは「支える」「支えられる」関係ではなく、調理現場もお年寄りの人も一緒になってやっていたんです。楽しかった記憶がたくさんあります。

むかしは混合収容であったけれど、いろんな人がいて、それが社会ですよ。

小学校の頃は敷地が広がったから、友達が走り回る、かくれんぼしたり、見当たらなくなればみんなで探したり、そんな風に遊んでいるのをお年寄りも暖かく見守ってくれていた。自分の子どもや孫のようにしてくれていた時代だったんです。

老人ホームの中にも子どもたちが入ってきて、それが一つの社会ようになっていたんです。

子ども期の、「みんな一緒に」「地域と共に」という経験が報恩積善会の現在の事業につながっていることがわかる。

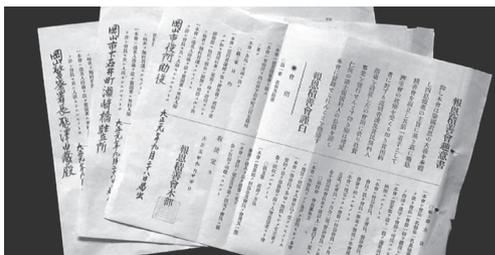
また、これらの事業運営に際して、「報恩積善会後援会」が組成されており、「報恩積善会」への支援と共に、地域を支えます」と理念が示されている。

社会福祉法人報恩積善会の理念は「和」を標榜している。「和」とは、手を取り合い誰ひとりこぼれることのない大きな輪をつくることの大切さであり、私たちは地域の一員として互いの手を携えて、誰もが和やかに生活できる社会の実現を目指す」と理念を掲げている。

地域とともにあることを理念のみならず具現化し取り組んでいる現状があることがわかる。

II 考察

報恩積善会の養老事業に対する目的意識を表す趣意書には、他の養老事業を手掛ける施設と同様に、強い思いが見て取れる。



報恩積善会趣意書

出典：『創立100周年記念 流光を紡いで DVD』（2012年9月）より転載

一つは、当時の貧困や高齢者の生活難、困窮に対する強い思い、二つ目に、高齢者や貧困者が置かれている状態や、その人々に対する人道主義的姿勢、三つ目に当時の貧困や困窮に対する問題意識とその改善、克服のために社会に働きかける啓蒙活動にも人道的視点がうかがえる。

運営は厳しい時代の中にもありながらも、趣意書を作って啓蒙活動を続けながら、貧困状態にある人々は「個人の責任ではなく、社会の責任でもある」ことを説いていった歴史がある。

多くの養老事業は宗教的価値観から事業に取り組む施設も多い中で、報恩積善会は宗教からスタートしたものではなく、「他者を思いやり」、「社会から排除することなく」、「様々な人が存在してこそ社会である」という価値のもと運営が継承され現在に至っていることがうかがえた。

前理事長は、創設当初の時代を以下のように語っておられる。

「はつばあさん」はよくやりぬいたなあと孫ながらに思います。

揺るぎない志をもち他者に関わることは、想像以上のエネルギーとバイタリティを必要とするものであろう。その志を受け継いだ現在の報恩積善会の取り組みもまた熱き志を抱いて行われている。

III おわりに

報恩積善会の歴史を検証していくと、「ノーマライゼーション」が具現化されていることを強く感じる。私たちの社会はまさに様々な人々がいることが当たり前であり、子どもも高齢者も障がいを持つ人も皆がともにあることが当たり前であり、その常態化のためにはかかわることが何よりも大切となろう。

まさに、誰も排除しない社会は報恩積善会の長い歴史の実践の中にあるといえよう。

謝辞

コロナ禍でのZoomでのインタビューにも快く応じていただきました報恩積善会前理事長さま、貴重な資料やDVDを提供いただきました施設長さまに心より感謝申し上げます。

この研究は、「さっぽろ慈啓会共生（ともいき）助成事業」令和3年度の助成をうけたものである。

注)

1) 小野慈善院は明治6（1873）年に金沢市木ノ新保に家屋一棟を購入し、視覚障害者20名余りを収容したことから始まり、明治12（1879）年には、金沢市

彦三 2番丁その他に家屋6棟を購入し生活困窮者200余名を収容。明治38年8月1日 金沢市常盤町に新院舎竣工。「小野慈善院」と称す。昭和23年12月28日「財団法人 小野陽風園」と改称。昭和27年5月9日 財団法人から社会福祉法人に組織変更し「社会福祉法人 小野陽風園」と称す。昭和44年4月1日「社会福祉法人 陽風園」と改称する。社会福祉法人「陽風園」の140周年記念誌には園祖の小野太郎の慈愛溢れる生涯として、救済活動の経緯や内容が記録されている。

- 2) 笠井信一のプロフィールについて、山本浩史(2019)は「この時代の県知事というのは、今のような民選ではなくて、中央政府から送り込まれてくる官職で、元々は内務省の官僚です。…中略…笠井は「わが国の救貧法は甚だ不完全にして而も酷である」といっており、この言葉からも当時の福祉政策に対して問題意識を持っていた」とし、「さらに笠井の文章を読むと、貧富の格差が社会の大欠陥となり、いわば貧困問題は個人の問題ではなく、社会全体の問題なのだという捉え方をしている」と述べている。
- 3) 石井十字は明治20年、四国巡礼帰途の母親から男児を1人預かったのをきっかけに、孤児救済事業を始める。三友禅寺の一面を借り、「孤児教育会」(後に「岡山孤児院」と改称)の看板を掲げた。明治時代には社会福祉制度がなかったため、資金は個人の善意や寄付に頼るしかなく、「孤児教育会趣意書」を作成し、キリスト教関係者に協力を仰ぎ、孤児教育会を会員組織としてキリスト教徒や医学校の同窓生を中心に会員を募り、県内外の人に理解を求めた。明治24年には、名古屋地方を襲った濃尾地震による被災児93名を救済。明治25,26年は、2年続けて岡山市で大洪水があり、院の子どもたちは水防、救助、給食、後片付けなどに出動して町の人に感謝される。明治39年、東北地方一帯の冷害による大凶作により、多くの農家が破産、離散状態となった。この被災地救済に着手し6回に分け計825名を岡山に送り保護した。その年の院児数は1200名に達するなど、日本で最初に孤児院を創設した「児童福祉の父」といわれている。
- 4) 大原孫三郎は1987年東京専門学校(現早稲田大学)に進んだが、在学中に足尾銅山の鉱害地区を視察して企業の社会的責任を痛感し、帰郷後は、孤児たちの父となる石井十次に接して岡山孤児院を援助し、また、大原奨学会を通じて多数の若者の学資を支援するなど社会事業に奔走した。1906年に倉敷紡績社長に就任。「職工の人格を認めその幸福を増進すること」を基本方針として、工場労働者の福祉の向上に努める一方、労働問題を科学的側面から解決するため倉敷労働科学研究所を創設。また倉敷町民とクラボウ従業員の健康増進のための倉敷中央病院や児

島虎次郎が収集した絵画を陳列する大原美術館を開設するなど文化都市倉敷の礎を築いた。その一方で、倉敷紡績(クラボウ)と倉敷絹織(現クラレ)という2つの企業をはじめ、中国銀行・中国電力・山陽新聞社の基礎を築き、産業の振興に尽くした資産家としての企業活動と同時に社会事業にも大きな貢献をしてきた人物である。

- 5) インタビューにおいて、田淵はつ氏について話していただくと「はつばあさん」と呼称されているため、ここでは「はつばあさん」と表記する。
- 6) 「つしまみんな食堂」は施設の所在地が岡山県北区津島笹が瀬であるため「つしま」の地名を用いている。

文献リスト

- 安藤和幸(1993)「渡辺海旭の社会事業思想と実践」『社会事業史研究会』21, 75-88.
- 井村圭荘(1998)「高齢者福祉発達史の一断面(Ⅲ) —大正期の報恩積善会の成立と展開を中心に—」『岡山県立大学短期大学部研究紀要』5, 23-36.
- 井村圭荘(2020)「高齢者福祉の今昔—田淵藤太郎と報恩積善会」山陽放送学術文化財団編『慈愛と福祉 岡山の先駆者たち2』183-205. 吉備人出版, 岡山.
- 岩田正美(2021)「貧困の戦後史—貧困の「かたち」はどう変わったのか—」『社会事業史研究』59, 11-24.
- 小笠原祐次(1986)「戦前期養老事業文献にみる養老院に関する処遇と処遇観」『社会事業史研究』14, 1-12.
- 小笠原祐次(2000)「戦後高齢者福祉制度の展開」『社会事業史研究』28, 21-33.
- 小笠原祐次(2001)「養護老人ホーム・報恩積善会の創設と展開」『人間の福祉』9, 27-51.
- 山本浩史(2019)「濟世顧問の活動と社会事業」山陽放送学術文化財団編『慈愛と福祉 岡山の先駆者たち』, 279-304. 吉備人出版, 岡山.
- 吉田久一(2001)「日本における「慈悲」的福祉思想の展開—仏教的「平等」と福祉—」『社会事業史研究』29, 73-86.
- 吉田久一(2003)『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想』勁草書房, 東京.
- 吉田久一著, 長谷川匡俊・永岡正巳・宇都榮子編(2015)『日本社会事業思想小史』勁草書房, 東京.
- 全国社会福祉協議会老人福祉施設協議会編(1984)『老人福祉施設協議会五十年史』3-8, 全国社会福祉協議会, 東京.
- 報恩積善会(2012a)『創立100周年記念誌 流光を紡いで』
- 報恩積善会(2012b)『創立100周年記念 流光を紡いで DVD』

受付：2021年11月30日
受理：2022年1月14日